
trick or ~恋のイタズラ~

シマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

trick or 〜恋のイタズラ〜

【Nコード】

N9538S

【作者名】

シマ

【あらすじ】

私が好きになつたのは幼馴染みで先生でした。美術以外に興味のない高校生の牧村美樹と情熱的な幼馴染みの数学教師の伊藤望。好きだけど、好きだから上手く言えない。過去に引きずられて前に進めない……私の気持ちに気付かないで……

ブローグ

私、牧村美樹（まきむら みき）高校2年。絵を描く事が大好きで、恋愛事には興味なし。それでも良いと思っていた。彼を好きだと気付くまでは……

その人は、7つ年上の幼馴染み”伊藤 望”（いとう のぞむ）自分の気持に気付いたら、歳の差が気になった。女の子らしくない自分が嫌で、でも……どうしたら良いか分からないくて苦しかった。

私が『望君』と、彼の事を呼べば、彼は私の事を『みーちゃん』と、呼ぶ。その度に見せる笑顔に鼓動が速くなった。ただ、傍にいられるだけで良かったはずなのに……

彼が大学生の時、彼女がいるって聞いて……彼が人のモノになって、落ち込んだ。

そして今は……

“ 高校の先生と生徒 ”

黒板の前に立ってチョークを滑らせ文字を綴る姿に見とれてしまうと同時に、更に遠くなった二人の距離。

今、あの人にとって私は、生徒？
それとも幼馴染み？

それとも……

Trick or 恋のイタズラ

初夏を思わせる暑さの中、私は授業が終わると直ぐに美術室へと向かった。特別教室の集まる人気のない校舎に入ると、ヒンヤリとした空気が身を包み心地いい。少し軽くなった足で4階まで上がると足を止めた。うつ……どうしよう……入れない

幼馴染みで副顧問の望君は、少し明るい茶色の髪とスラツと伸びた手足。背が高く噂では大学生の時には、モデルにスカウトされたらしい。そんな新任教師は、あつと言う間に人気になり、部活の要件を話すだけでも気を使う面倒があった。……うん、我が身が一番……他の人が来るまで待とう

「あれ、牧村さん？早かったね」

内心大きな舌打ちをしながら、私は無表情を作ってから振り返る。望君の周りの生徒からの視線が痛い。彼の顔から視線を逸らすと、小さなため息を吐いた。気付かなくて良いのにさ！痛い！！生徒の視線が、痛いんだよ！！！！

「そうですか？普通ですよ」

この痛い視線から逃げたくて、急いで生徒たちの脇をすり抜け美術室に入ると、望君が追いかけてくる。頼むから！空気読んで！！私の腕を掴んだ彼を睨むと、眼で助けを求めている。ああ、生徒を振り切りたいのか……人を巻き込まないでよ

「コンクールの申込書の件で確認したい事があるから、ちょっと良

いかな？」

「……はい」

「準備室にあるからちよつと待つてね。じゃ、他の人は解散」

「えゝ何で？ いいじゃないですか」

そりゃ、嘘だもん。文句も言いたいだろうけどさ……皆さん、わざとらしいですよ。

離れようとする望君にわざと擦り寄る生徒を見ながら、これが同じ年齢なのか疑いたくなる。恋の成せるワザなのか、そこには女の色香を感じて驚いた。自分には無いものを見せつけられて私の中に、少しネガティブな感情が溢れてくる。暗くなる自分を抑えようとして、無意識に制服の胸元を握り締めていた。

「牧村さん、具合が悪いの？」

近くから聞こえた声に弾かれた様に顔を上げると、目の前に望君の顔。驚いで悲鳴を上げそうになるのを堪えていると、彼が額に手を添えて熱を測った。

「熱はなさそうだけど顔色が悪いな」

「だ……大丈夫です」

言葉に詰まりながら返事をする、彼が余計に心配そうな顔で私を見ている。お願い、私を構わないで……放って置いて……望君の背中越しに見えた生徒の視線は、嫉妬と怒りが浮かんでいる。私の事なんか無視してよ

「とにかく中で休みなさい」

そう言うた望君は周囲の生徒を無視して、私の手を引いて美術室へと入って行った。廊下から生徒達の文句が聞こえたけど、望君はで私は内心泣きそうだった。ヤバイ……ファンの子に絶対に睨まれた美術室に入ると彼は、直ぐにドアを閉めて私を椅子に座らせた。隣の準備室へと消えた彼の背中を見ながら、私はさっきまで廊下にいた生徒達の事を思い出してた。みんなお洒落で可愛いメイクしてそれに比べて私はノーメイクで、髪も束ねただけ……なんか惨めだなあ

グルグルと考え込んでしまった私は、俯いたまま顔を上げる事が出来ずに黙って自分の足元を見ていた。気が付くと大きな体を屈めて、彼が心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「本当に大丈夫？辛いなら家まで送るよ。みーちゃん」

「……大丈夫です。その呼び方は止めて下さい。幼馴染みじゃなくて、今は先生なんだし」

私の言葉に少し寂しげな表情を浮かべた望君が、ゆっくりと手を伸ばして私の頬に触れた。その温もりが、懐かしくて苦しい思い出を蘇らせた。

まだ、幼かった頃。

7歳の歳の差なんて気にならないほど意気投合して、二人でよく遊んでいた。空き地でキャッチボール。虫採りや魚釣り。性別も歳の差も関係なく、ただ楽しくて仕方なかった。

だけど、先生が中学に上がった頃から、少しずつ変わってきた。体格の差。急に背が伸び筋肉が付き、声が低くなり大人の男性へと少しずつ変わる。その変化が自分との壁を感じさせて、次第に距離を置いた。

そして、先生の事を好きな子から嫌がらせを受けるようになった。

『なんでアンタみたいなガキが隣いるのよ』

『アンタがいるから伊藤君に彼女ができないんでしょう』

『邪魔よ!』

追いかけて、階段から突き飛ばされた。気が付いたら私は病院のベッドの上で、望君が今にも泣きそうな顔で手を握り締めていた。そんな彼の姿を見たくなくて、私は事実を何も話さなかった。

思い耽っていた私は望君が自分を見つめている事に気付いて顔を上げた。何をするでもなく、ただ私を見つめる彼の瞳に、今まで見たことのない影が映っていて少し怖い。どうしたんだろう？私が、黙っているから、仕事の邪魔かな？

「先生？もう帰るね」

「あ……ああ、作品を仕上げなくて良いのか？」

望君の言葉に一瞬、迷ったけど廊下で別れた生徒を思い出すと、昔の事を思い出して身体が強ばった。

「疲れたからいいや。あの子達に絡まれるのも嫌だし、明日にする」

「み……牧村さん、何かあった？」

私の目の前には、感情を押し殺した彼の顔。初めて見たその表情に、身体は更に強ばり言葉は出なかった。な……なに？怒ってる？なんで……

私は急に望君が怖くて逃げたくなった。今まで感じた事のない震えが身体を走る。強ばる身体で無理矢理立ち上がると、目眩に襲われその場に座り込んだ。

「美樹！！」

慌てた様子で私の傍に来る彼の姿に、誤魔化していた気持ちが溢れ出す。彼の腕に支えられて、何時もより早く打つ鼓動がばれないか心配になった。

「家まで送るから少し待ちなさい」

座り込んだままの私の身体を軽々と持ち上げて、再び椅子に座らせた望君が一言残して美術室を出ていった。良かった……気付かれない。

足音が聞こえなくなった事を確認した私は、鞆からスケッチブック取り出すと一枚破った。デッサン用の濃い鉛筆で望君にメッセージを書いて机に置く。鉛筆を筆箱に片付ける時、家から持ってきた水筒に気付いた。飲んでくれるかな……

メッセージを書き足して水筒を文鎮代わりに紙の上に置くと、見付からない様に非常階段から降りて外に出た。

目元に浮かんだ涙を瞬きで誤魔化して、私は強い日差しを避けながら自宅に向かって歩き始めた。

さて、帰ろう。明日は、また笑えるから今日は見逃してよ。気付いて欲しくないんだ……私のキモチ

3 Side 望

職員室から戻ると、美樹の姿がなかった。予想はしていたが、落胆の気持は隠せず思わず大きなため息が漏れた。何時からだ……彼女が俺を避けるようになったのは……

家が隣で、母親同士が友人だったせいで、よく一緒に出かけていた俺たちは、いつも隣にいる事が当たり前だった。7つの歳の差なんて気にならなかった。

しかし、気が付くと彼女は俺を避けるようになっていた。そんな彼女が両親と共に、体育祭に来ると聞いて俺は朝から気合いが入っていた。彼女に良いところを見せたくて、競技も頑張った。

そんな俺を突き落とす出来事が起きた。それは、昼の休憩中の事。母親が彼女には口止めされたと前置きをして話した事は、初めて聞く内容だった。

『え？イジメ？』

『やっぱり、知らなかったのね……中学生に絡まれていたのよ』

『……俺のせい？』

この顔のせいで、余計な事によく巻き込まれる。好きだと言われて付き合っても、いつも最後に言われる言葉は”イメージと違う”俺のイメージがどんなモノかは知らないが、言われるこちらとしては苦しいだけだ。茫然としている俺に、親が何か言いかけた時、クラスメイトが慌てて駆け寄ってくる姿に気付いた。

『伊藤！お前の連れの女の子が、女子の集団に連れていかれた！！』

『なに……どこだよ……どこに連れて行っただよ!!』

急いで彼女の姿を探す。特別教室のある人気のない校舎から、言い争う声が聞こえて中に入ると同時に、大きな物音。俺の目の前には、彼女が冷たい廊下の上で寝ていた。近くの階段には、数人の女子が逃げる姿が視界に入っていた。

『みーちゃん?……美樹!!起きろ!美樹!!!!』

彼女の傍に駆け寄り声を掛ける。ぐったりとして返事をしない彼女の姿に、茫然としてみると、親が俺を彼女から引き離した。その後、救急車を呼んだり、彼女の両親に連絡をしている親の姿を見ながら、何も出来ない自分が悔しくて、早く大人になりたかった。

昔の事を思いだしながら彼女が座っていた椅子の傍に立つと、一枚の紙と水筒に気が付いた。水筒……忘れて帰った……何か書いてある?

『大丈夫だから歩いて帰ります。水筒は望君の好きなコーヒーだよ。お仕事、頑張つてね』

直接、呼ぶことのなくなった俺の名前。少し角のある彼女の文字を指でなぞると、愛しさが込み上げてくる。何時も真つすぐに俺を見ていた瞳は、今……何を見ている?募る思いに彼女の代わりに、水筒と手紙を抱きしめた。

「……美樹……」

小さな声で呼んだ彼女の名前は、風に乗って静かに消えた。

翌日の放課後、ホームルームが終わると直ぐ教室を飛び出した。後ろでクラスメイトの声が聞こえたけど、構ってなんていられない早く行って仕上げなきゃ！特別教室棟の人気のない階段を二段跳びで一気に駆け上がる。息を切らしながら着いた美術室には、まだ誰も来ていない。誰もいない部屋の中で机を組んで場所を作った。よっしゃー良い場所ゲット！……あれ……画板が……ない？

「おや、牧村さん早かったね」

聞こえてきたのは美術教師で、正顧問の三浦先生の声。望君とは大学からの知り合いで、正反対の雰囲気なのに何処か似ている二人は仲が良い。振り向くと三浦先生だけがドアの側に立っていた。今日は一人か、良かった。

「三浦先生、サボりじゃないですよ。それより、画板知りませんか？」

「ああ、しばらく使う予定がないからなおしたけど？」

困った……多分、今日も邪魔ものが来るはずだし、代わりの物は……教室の中をキョロキョロと視線を動かすと、視界に入ったのは竹製の１メートル定規。うん、代わりに使わせて貰おう。

「先生、定規を少し借りて良い？」

「定規？構わないけど、何に使うの？」

「害虫駆除です」

不思議そうな顔をする三浦先生に向って、ニツコリ笑って答えを誤魔化した私は机の横に定規を立て掛けると道具の準備を始めた。大きなイラストレーションボードを机に置きパレットを開く。準備をしていると、次第に気分が高揚してくる。思わず鼻歌を歌いながら、広げた絵の具。今、描いているボードに使っているのはアクリル絵の具。アクリル独特のハッキリとした色がパレットに並んだ時、ドアが開くと同時に二人の生徒が入ってきた。

「みーちゃん、置いてくなんて酷い！」

「牧村！！会いたかったぜ！」

入ってきたのは、中学からの友人二人。雪村 茜（ゆきむら あかね）は通称”雪ちゃん”、頼れるお姉さんの存在で、私の相談相手で保護者。そしてもう一人、諸留 和也（もろどめ かずや）は、雪ちゃんと私の邪魔をする害虫。今日も、入ってくるなり私に抱きつかうとして駆け寄ってきた。

やっぱり、この害虫は邪魔！！さっき借りた定規をしっかりと握り締めると、思いつき横に振り抜いた。

「横一文字切り！！」

「ぐうふ……牧村……マジ痛てえ」

おお、奇麗に決まった！……これはハマるわ。私は竹製の定規が折れていないか確認してから、鞆の中から一冊の小説を取り出し雪ちゃんに渡した。

「この小説面白かったよ！続き貸して」

「みーちゃん……やり過ぎ」

そう言いながらも笑っている雪ちゃんから今回借りた小説は、女子高生が戦国時代にタイムスリップして女剣士になって悪者を退治する話。雪ちゃんが貸してくれる小説は何時も面白い物ばかりで、有名な作家さんから聞いた事のない作家まで幅広い。何時もどこで見つけてくるのかな？小説の主人公を真似て、ちよつと剣士気分！なんて、のほほんと考えていたら肩を掴まれて、私は油の切れた口ボツの様なきこちない動きで振り向くと、怖い顔した三浦先生がいる。うお！？こ……怖！！ぎゃゝマジで怒ってるよ！

「牧村さん、学校の備品は大切にしようね」

「ひゃい、ごめんなさい」

肩を竦めて誤ると同時に、諸留からもう一度呻き声が聞こえた。あれ？私、何もしてないよ？疑問は視線を戻した瞬間、直ぐに解決した。仁王立ちしている望君の横で、諸留が頭を押さえて蹲っていた。ああ、ゲンコツ喰らったな……ざまあみろ！！

「ぼ……暴力反対」

「高校生にもなって、女子に直ぐ抱きつく奴がいるか！！」

痛がる諸留の姿を見て、私が鼻で笑うと彼は不貞腐れた様な表情を浮かべていたけど、無視してボードに向かった。色鮮やかなアクリルで真っ白なボードを塗り替えるこの瞬間が私の一番好きな時間。気が付けば、私の周りから音が消えてボード以外見えなくなってい

た。

「みーちゃんが集中してるから、今、邪魔をしたら本気で嫌われるわよ」

「牧村……もうちょっとくらい構ってくれよ」

「こうなったら無駄でしょう」

そんな会話に私は全く気付かずに、時間いっぱい色を塗り続けた。大好きな人達と、大好きな絵を描く幸せな時間。

この瞬間が消えてしまうなんて、この時は思いもしなかった……

コンクールの締切間近で、毎日美術室に通っていた私は、思いっきり油断していた。何時もの様に授業が終わりダッシュで美術室に向かう途中、4人の女子生徒に捕まった。

「ねえ、牧村さんか言ってくれない？入部出来ないなんておかしいじゃない」

「そう言われても部長の判断だし、下っ端の私には何も出来ないよ」

「先生達と仲が良いんでしょう。直接、先生に言つてよ」

望君と三浦先生が顧問になった途端、文科系で人気のなかった美術部に入部希望者が殺到した。しかし、先生目当ての生徒の大半が活動に参加せず先生と話ばかりしていたせいで、真面目に絵を描きたい生徒が減ってしまった。その事態に怒った部長は、大半の生徒を追い出してしまった。入部希望なら私じゃなくて部長に言つてくれよ

「ちょっと、聞いているの！！」

「聞いているよ。入部希望者は、部長の許可を貰って下さい」

「部長が駄目って言ったから、貴女に頼んでるんでしょう！」

平行線の会話にイライラしてきた女子生徒の一人が、私を横から突き飛ばした。その場に座り込んだ私を睨むと、距離を詰めてくる。スカートに付いた汚れを払い落しながら立ち上った私は、彼女たち

に背を向けて美術室に向って歩き出した。何を言われても、私にはどうしようもない。

「先生に気に入られているからって調子に乗らないでよ!!」

「そうじゃなくて、私にそんな権限はないってば。他を当たってよ」

「何、その態度。ム力つく」

その一言が引き金だった。一人の生徒が私の後ろから制服を引っ張り、思いつき横に倒れた。私が痛がるその姿を見て、彼女たちがニヤニヤと笑っている。そんな彼女達が昔の記憶と重なった。

望君の事を好きで私に嫌がらせをしてきた年上の女の子。もう何年も前の事なのに、その時の恐怖が甦り私の身体は動かなくなる。

昔の事だ！彼女達は違う……私は……

「何よ。さっきまでの強気な態度はどうしたの？」

「一人で強がって……バカじゃない!!」

一人が腕を高く持ち上げる姿が視界に入る。”殴られる!!”そう思って目を強く閉じた瞬間、誰かの声が聞こえた。

「お前たち、そこで何をしている!!」

小さな舌打ちの音が聞こえた後、そつと目を開けた私の視界に入ってきたのは、蜘蛛の子を散らすようにバラバラに逃げる生徒の後ろ姿。安堵した私に息を切らして駆け寄って来たのは望君だった。うそ……バレタ?……いや、この距離なら声は聞こえてないはず。

「大丈夫か!!」

「……ちよつと、転んだだけだよ」

誤魔化した私を睨んだ望君は、腕を掴んで立ち上がらせるとスカートの汚れを払い落してくれた。優しいな……勘違いするじゃん

「雪村が心配してたぞ」

「そつか……謝らないと……」

近くに落ちていた自分の鞆を拾うと、両手で強く抱きしめた。

”大丈夫……大丈夫”と、呪文のように心の中で繰り返した後、私は望君を追い越して一人で美術室に向って駆け出す。後ろから望君の大きなため息が聞こえたけれど、気付かないふりをして足を止めずに階段を駆け上がる。美術室に入ると、泣きそうな顔の雪ちゃんと、安堵の表情を浮かべた三浦先生が見えた。

……心配掛けてごめんね……

私は、勢いよく美術室のドアを開けると、雪ちゃんに抱きついた。泣きそうな彼女を安心させたくて、背中を軽く叩いていた。

「雪ちゃん、お待たせ!」

「どこいったのよ!!」

「ごめんよ」また、入部希望者に捕まったのさ」

雪ちゃんから離れると、頭を掻きながら笑って誤魔化した私を見て、三浦先生が首を傾げた。雪ちゃんは安堵の表情を浮かべながら、「また?」と呆れた声を出していた。そう、入部希望者に詰め寄られるのは、初めてじゃない。真黒な髪に、規定通りの制服と鞆。真面目そうに見える私は、恰好の的の様でもう数え切れない。

「みーちゃんに言っても、意味ないのにね」

「大屋部長じゃ、門前払いだからでしょ?」

肩を竦めた後、私は鞆を置くと棚からボードの準備を始めた。何時ものように机を組んでいると、遅れて望君が美術室へと戻ってくる。望君から顔を逸らした時、腕を組んで考え込んでいた三浦先生が口を開いた。

「さつきから気になっていたけど、どうして大屋君じゃなくて牧村さんの?」

「……今更、何を言っているんですか……」

三浦先生の質問に答えたのは、雪ちゃん。雪ちゃん以外、私が入部希望者に絡まれている事実を、詳しく知る人はいない。雪ちゃんは静かな怒りを滲ませて、先生に詰め寄ろうとしている。待って！秘密だつて言つたじゃん！！

「雪ちゃん、駄目！！」

「本当の事を話べきだよ！どうしてみーちゃんばかり、こんな目に遭わなきゃいけないの！！」

慌てて雪ちゃんの口を塞ごうとして駆け寄ろうとした時、グラツと床が動いた気がした。その次の瞬間、私は後ろに倒れている事に気付いて目を強く瞑つた。ぶつかる！！………あれ？痛く………ない？

不思議に思いながら、そつと目を開けると私の腰に回された腕が見えた。次に見えたのは、机と真つ青な顔をした雪ちゃんと三浦先生の姿。あれ？二人がココにいるという事は……

「……軽いな……」

私の背中から聞こえた声は、望君。後ろから抱き締める様に支えられている事に気付いて、頬が熱を持つ。うひゃ！！恥ずかしい！！離して！密着し過ぎ！！！！

自分の状況に耐えきれずに、慌てて腕から逃げようとしたけど、眩暈がして私はその場に座り込んだ。

「みーちゃん！！大丈夫なの！？」

「うう……ちよつと貧血……うゝ気持ち悪い」

「また、食べてないだろう。真理さんが心配していたぞ」

ぐうつ！お母さん、どうして望君に話すかなあ。ため息混じりに話す望君の後ろで、ユラリと動く人影。少し俯きながら、私に近づく雪ちゃんは何時もと違う雰囲気を漂わせている。もしもし？……ゆ……雪ちゃん？目が……目が怖いよう……！

「また、食べてないの！！人間は食べなきゃ生きていけないのよ！」

「う……うめんなしゃい」

俯いて誤る私を、望君は横抱きにして持ち上げると、隣の準備室へと連れていかれる。いや！恥ずかしいから下してよ！！下して貰いたくて、身体を擦ってみたけどピクリとも動かない。

「少し寝ろ。後で起こすから」

そう言いながら望君は、私を部屋の隅にあるソファーに下ろしてくれた。

「でも……」

戸惑いながら起き上がったとした私の肩を押してソファーに寝かせた望君は、自分の着ていた上着を掛けてくれた。微かに香るシトラスに懐かしさを覚える。久ぶりに感じる……この香は、望君の好きな香だ……

「ないよりは、マシだろう。良いから休め」

そう言って望君は、私の頭を優しく撫でてくれた。その柔らかい感触と、暖かさに涙が溢れそうだった。ねえ、その優しさは、生徒だから？それとも……

聞きたい言葉は胸に締まったまま、私は黙って頷くと静かに瞳を閉じた。

お願いだから……優しくしないで……

私が目を覚ました時、辺りは薄暗くなっていた。あれ？今何時？
えつと……寝起きで働かない頭で時計を探すと、時刻はすでに7時。
文化系の部活は帰宅の時間を過ぎている。な、な、な、なんですと
！！ちよつと待って！えつと……美術室に入ったのは4時で……3
時間！？3時間も寝てたの！！

「はあ？マジ？……仕上げがああー！！」

「うるさい」

頭を抱えて叫んだ私は声に気付いて振り向くと、パソコンに向か
って仕事をしている望君がいた。あ、いたんだ……気付かな……う
ん？望君だけ？三浦先生は、どこだ？……それより

「何で？」

「家には連絡したから安心しろ。車で送ってやる」

いやいや、それよりもっと大事な事があるでしょ？仕上げ出来な
かった……なんで起こしてくれないのさ！仕上げが出来なくて不機
嫌になった私に、望君は苦笑している。

「ちゃんと食わないから貧血になるんだ。寝てないのか？」

「そうじゃなくて、起こしてよ。三浦先生は？」

「あいつなら先に帰した……聞きたい事があるから、二人になりた

「かつたんだ」

何だ？わざわざ他の人のいない時に聞く事なんて……数学が赤点！？いや、いや、テストはまだだし……分らないなあ……

「聞きたい事ってなにさ。人に聞かれたくない事？」

「ああ、他の連中には絶対に聞かれたくない」

嫌な予感かした。望君の話し方が教師の話し方じゃなく、普段の話し方に戻っていたから。寝かされたソファアの上で、これ以上後ろにさがる事も逃げる事も出来ない。椅子から立ち上がり、近付いてくる彼を私は黙って見ていた。ただ、歩くだけでも様になるって、どれだけいい男なの……クソムカつく。

心の中で意味のない文句を言いながらも、私は彼から視線を反らす事が出来なかった。私の前に来た望君は、膝を折り目線を合わせてきた。その瞳に何か強い決意を感じて、身体は無意識に竦んだ。なに……様子が違う……こんな望君を私は知らない……

「教えてくれ美樹。あの時、何があった？」

「……あの時……」

竦んで動かない頭と身体には、望君が聞きたい事がすぐには理解出来なくて、同じ言葉を繰り返したただだった。何？……何の事？あの時って……イツ？

「そうだ。9年前のあの体育祭の日に、何があった？」

“9年前”の一言で、ビクツと身体が震えだす。今だに忘れられ

ない忌まわしい出来事。震える身体を抑えようと、私は膝の上で指を強く組んだ。声が震えないように気を付けながら、ゆっくりと私は彼に嘘を吐いた。

「文句を言われて逃げようとして階段から落ちた」

「嘘だ」

望君にはつきりと断言されて言葉に詰まる。私は、息をするのも忘れて望君を見詰めた。私を見詰め返す望君の目は真剣で、心の底から私を心配してくれていると分かる。それでも……いや、それだから、本当の事を話す気は全く無かった。

本当の事なんて言える訳ない。

9年前のあの日、男の人に襲われたなんて……

8〜9年前のあの日々（前書き）

本文には、性的表現や児童趣味的な表現が含まれます。
苦手な方は、回避して下さい。

8〜9年前のあの日

望君の体育祭を見学に来ていた私は、一人になった瞬間、知らない女子生徒に拘束されて視聴覚室に連れて行かれた。その部屋には、私を拘束した生徒とは別に、もう一人の女子生徒の姿があった。彼女は、私を見るなり睨み付けると、髪を掴んでモニターの前に連れていった。髪を掴む痛みに私が顔を歪めると、その女子生徒は楽しげに笑う。なんなのコイツ！

『お子さまには、現実を知って貰わなくちゃね』

『放して！望君の所に帰る！』

『うるさいカギ』

怒鳴り付けられ黙った私の目の前のモニターに、映し出された映像。その映像が何か、幼かった私には最初は理解が出来なかった。小学生の女の子が裸にされ、大人の男性が身体中を触り次第に手が下の方へと下がる。

ナニコレ

頭に疑問。それに答える様に、ニヤニヤと女子生徒が私に言った言葉は意味が分からなかった。

『大人の楽しみよ、クソガキ。これだけじゃないからね』

ねっとりとした笑みを浮かべた女子生徒が、ドアを開けて大人の男性を連れてきた。その男性に初めて見た性的欲望の色。その時、

初めて恐怖を感じて私は死に物狂いで暴れ始めた。

『大人しくしな』

バシッ！

頬を叩かれて呆然となった私の動きが止まると、一瞬で男が着ていた服を捲り上げる。目の前の映像とリンクする自分の状況。恐怖と不快感で涙が溢れ出した。

『ひい！！嫌！嫌だ！！！！触らないで！望君！望君！！！！！！！！！！』

『望君、望君って……何でこんなガキは良くて、私がそう呼んだらダメなんて……ムカつくんだよ』

見下ろす彼女の目には、私に対する憎しみ。ただ、この生徒は望君の事が好きだって事と、私が邪魔なんだって事は分かった。

私が叫んで抵抗しても、男の手は止まることなく、大腿から下着の中へと移動した。目の前のモニターでは、女の子が男性によって貫かれ痛みと恐怖に泣き叫んでいる。自分もこうなると思った瞬間、逃げる為に叫びながら更に暴れた。

『うつ……嫌……嫌だ！放せ！！』

動かした足が男の溝おちに当たり、呻きなが身体を折った。驚いて緩んだ拘束を振り切り、走って教室を飛び出して夢中で走った。後ろから追いかける女子生徒。一番近い階段を駆け下り出口を探した。

その後の事はよく覚えていない。途中の階段の踊り場で捕まり、突き飛ばされた。下に落ちる途中、駆け寄る望君の姿が見えた気がした。

未だに消えない男の手の感触。

過去を思い出した私の身体は、無意識に震えだしていた。自分を抱き締める様に腕を回し、震えを誤魔化す。俯いて望君から視線を反らした私は、彼を気遣う余裕なんてなかった。必死に不快な感触を消し去ろうとしていると、頭の上から苦しげで悲しい声が降りてきた。

「美樹……悪かった。俺のせいで怖い思いをさせた」

俯いていた私の身体を望君が優しく包み込んでくれる。その温かさに、全てを話してしまいたくなる。でも、ダメ……知ったら望君は……責任感の強い人だから

「望君は悪くない。だから、私の事は気にしないで……同情も罪悪感もいらない」

抱き締める望君の身体から一瞬緊張を感じた気がした。望君の腕から逃れようとした私を、彼は更に苦しいくらい強い力で抑え込んだ。急に……なに？

「罪悪感を……感じるような事があつたんだな」

「なっ！？ない！！」

「同情って、そんなに酷い事があつたんだな」

私は、自分の迂闊さを悔やんだ。これ以上話せば余計な事を言いそうで、私は必死に首を横に振って否定した。ダメ！言っちゃダメ

……お願いよ、気付かないで……これ以上優しくしないで！

「そんなに俺は信用出来ないのか？」

「えっ？」

驚いて動きを止めて、望君に視線を向ける。望君は真っ直ぐに私を見詰めていた。悲しみが浮かぶ瞳。私は思わず望君の頬に手を伸ばして触れた。私……傷つけた？望君を……キズツケタノ？

「そんなに俺が怖いのか？」

彼に触れる手から微かに震えが伝わってくる。違う……違う……怖いのは望君じゃない。本当に怖いのは……

「違う……望君が怖いんじゃない。信用出来ないんじゃないの」

「なら……何故、話してくれないんだ」

望君の手が頬に触れる私の手を、優しく包み込む。その手の温もりにすがりたくなる自分を叱咤すると、ぐっと唇を噛んだ。本当に怖いのは自分。彼に全てを打ち明けてしまいそうな自分の弱い心。だから、お願い。悲しまないで

「未だに忘れられない自分が嫌なの……望君に……先生に迷惑をかける自分が嫌なの」

「美樹」

望君の口から漏れる掠れた声。ただ、自分の名前を呼ばただけ

なのに、酷く切なくなる。望君が私を心配している。それは分かっている……でも、言えない。

「ごめんなさい」

「謝らなくていいよ。帰ろう」

私の頭をグシャグシャと撫でた望君が立ち上がると、机に戻ってパソコンを片付けている。その後ろ姿を見詰めながら、私は心の中で何度も同じ言葉を繰り返した。

大丈夫。私は大丈夫。大丈夫……言えば重荷になる。だから、本当の事は……イワナイ

帰りの車の中で私は望君の顔が見れなくて、窓に映り込む運転する横顔にそっと触れた。ごめんね。私が迷惑をかけるのも、あと少しだから……卒業までの間だから……

家の前に車が着く。少しなごり惜しい気持ちを隠して、お礼を言う。私は振り返らずに家の中へと入って行った。

「ただいま」

「おかえり。アンタは貧血だつて？ 望君にお礼は、言ったの？」

リビングから顔だけ出した母親を少し怨みのこもった眼で見つめると、腰に手をあて呆れた表情をした。何よ……呆れているのは、こっちの方よ。何時も一言、多いんだから！

「言った……余計な事言わないでよ」

「ちゃんと、ご飯を食べないアンタが悪いんでしょう」

それを言われると言い返せない。黙って自分の部屋に戻った私は、着替えると夕食を食べた。うーん、やっぱり食欲ないや……夕食を残そうか迷ったけど、母親に睨まれて無理やり全部食べるとお風呂に逃げた。

止まらないため息を吐きながら湯船に浸かった私は、これからの事を考えていた。

あと2年……いや、あと1年ちよつとで学校を卒業する。両親にはまだ話していないけど、隣町にあるイラストの専門学校に進学を考えている。実家を出て一人暮らしをしようとも……

望君から離れての新しい生活。きっと、寂しいしツライ……だけど、これ以上望君の傍にいる事は、いずれ過去の忌まわしい出来事

を話さないといけない日がある。その時を思うと、涙が頬を流れた。

『美樹くいつまで入ってるの？のぼせるわよ』

「はい」

母親の声で考えるのを止めた私は、お風呂から上がると自分の部屋に戻った。パジャマに着替えながら視線は自然と窓に向けてしまう。窓を隔てた隣には望君の部屋がある。

年頃の娘の部屋が、お隣さんとはいえ男の人の部屋の向かい側ってどうよ？

いつも疑問に思うけど、両親は部屋を変える気はないらしい。小さい時はよくお互いに窓から出入りして遊んでいたけど、今その窓には常にカーテンが閉められている。カーテン越しに見える灯り。何時もカーテンに手をかけるだけで、開ける事は出来ない。深いため息と共に、私はノロノロと布団にもぐりこんだ。

新しい生活の中で、時間が経てば……望君の傍にいない事に慣れるかな？

11 Side 望

自宅に着くと美樹は逃げるように家へと帰って行く。玄関へと駆け込む後ろ姿に、彼女が遠くへ行くような気がして思わず腕を伸ばしていた。いい年をした男が何をやっているのか……自分の女々しい行動に苦笑が漏れた。

「ただいま」

家に入ると母親が夕食を準備していてくれる。部屋に漂う食欲をそそる匂いに、少しだけ肩の力が抜けた。

「お帰り。今日は、早かったわね」

「美樹が体調を崩したから、送ってきた。仕事は持って帰ってきたよ」

「え！？みーちゃんは大丈夫なの？」

「貧血だよ。また、ご飯食べてないってさ」

心配する母親に俺は、苦笑しながら努めて軽く言う。夕食に手をつけた。急いで食事と風呂を済ませた俺は、自分の部屋に戻ると机に向かう。期末テストが近づき仕事の量は増える一方だが、生徒はお構いなし職員室にやってくる。学校では終わらない仕事を、持ち帰るのも何時もの事だった。パソコンと向き合いながら、授業計画の練り直しや、資料を纏めていると画面に明かりが映り込む。美樹の部屋に明かりが灯ると、自然と手は止まり彼女の部屋へと視線が向いた。

カーテンに映る彼女の影。その影に幾度となく手を伸ばしたくなる。9年前のあの日以来、開く事のないカーテンを見つめながら、思わずため息が零れた。

何度となく”あの日の”の出来事を彼女に訪ねた。しかし、答えは何時も同じ。

『文句を言われて逃げようとして階段から落ちた』

その言葉を言う彼女の表情は、恐怖で何時も泣きそうで胸が苦しい。

俺のせいで……俺の傍にいたせいで巻き込まれた出来事。彼女を連れだした生徒は、俺がふった相手だった。俺の言い方が悪かったのか、それとも、その気もないのに彼女達と付き合えば良かったのか、未だに答えの出ない堂々めぐりの中、一つだけ大きな疑問があった。

“あの日”以来、美樹は男性恐怖症になった。今でこそ普通に話をしているが、一時期はすれ違うだけでも怯える程酷い状態で、通学すら儘ならない状況だった。

不自然すぎる彼女の態度。誰も……彼女の両親すら知らない何かがあった。

今日の態度で、そう確信したが何かを聞き出す事よりも、彼女がこの先も怯え続けるのかと思うと、今でも美樹を連れだした連中が憎い。無意識に拳を握り締めた時、彼女の部屋の灯りが消えた。その事で、止まったままの仕事を思い出し、再びパソコンを叩き始めた。

おやすみ、美樹……良い夢を……

前日の遅れを取り戻す為、私は授業が終わると真っ直ぐに美術室へ走った。美術室のドアを開けると、まだ誰も来ていなかった。よっしゃ！落ち着いて描ける！

嬉しさに思わず歌を口ずさみながら、私はボードの準備を始めた。水汲みに廊下に出た時、昨日の事を思い出し神経を使ったが、何事もなくホッと胸を撫で下ろした。今日は何もなさそう

道具を広げた後、ボードに視線を移し黙って暫く見詰めると、筆を取り足りない色を足していく。数日の遅れを取り戻し、順調に進んだボード。一度、手を止めて少し離れた場所からボードを見て、バランスを確認した。ありや？……なんか……全体に締まりないなあ……ボヤける感じ？

何が足りないか考えながら腕を組んで唸っていた時、ドアの開ける音に気付いて顔を上げた。入って来たのは諸留。何時もより大人数の登場に首を傾げたけど、すぐにボードに視線を戻した。

ゆっくりと近付いて来る諸留に違和感を感じて再び顔をあげると、真剣な表情で私を見ていた。何だ？いつもと様子が違う

「どうしたの？ああ、これ以上近付かないで、まだ乾いてないから」

「なあ、本当に大丈夫なのか？」

「何が？」

「昨日の話だよ。また、絡まれたんだろう？」

誰から聞いたんだ？雪ちゃんの話すとは思えないけど……そんな

ことより、いつも邪魔して迷惑なヤツ。

「大丈夫だよ。それより、絵を描く邪魔をするなよ！」

イライラして口が悪くなったけど気にもせず、私は再びボードを見詰めていた。うゝん……どこが……足りないというより、全体的に色が薄いかな？

「大体、なんで数学教師が美術部の顧問なんだよ」

無視された事が気にいらないのか、それとも絡まれる原因だからか、諸留は急に望君への愚痴をブツブツと言い始めた。“すぐ叩く”とか“暴力教師”って、自業自得だろう？

「知らん、そんな事……でも、一つ言つとく」

諸留に向かって人差し指を立てた。数学教師になった事も驚きだけど、望君は油絵描くんだよね。それも、気が合う理由の一つなんだけど、それは置いといて。

「伊藤先生は、油絵上手いよ」

「えええ！？初めて聞いたぞ、そんな話」

驚く諸留を無視した私は、描く事を諦め片付けを始めた。一人で騒いでいる諸留のため息を漏らすと、ついでに望君の話しを始めた。本当に邪魔しかしないヤツだなあ。ああ、今日も完成しなかった。コンクールに間に合う？

「自宅でしか描いてないからじゃないの……確か県の美術展で入賞

してるよ」

「そついや、幼馴染みだったな。お前は見たことあるんだ」

諸留は望君の絵に興味があるみたいだけど、私はない。ないと言
うか……

「見た事ない。おばさんは見せてくれなかったし、本人とは会わな
いからね」

「会わない？家は近所なんだろう？」

意外そつな表情を浮かべた諸留に、私は思わず苦笑した。どうし
て毎日会う必要がある？ただのご近所。ただの幼馴染み。用事でも
なければ会う事も、話す事もない。

……そつ……ただのご近所さん。結局は他人だもん

「いくら近所で親が仲良くても、毎日、会う訳ないでしょう。家より学校で会う方が多いよ」

不思議そうに首を傾げる諸留に、私は肩を竦めて誤魔化した。使った道具を洗う為に、廊下の水道に行こうとして動けなくなった。ドアの小窓から準備室前に、数人の女子生徒が見えた。その中に一人だけ見覚えのある顔。

……望君の追っかけがいる……

一瞬、さっきの話しの内容を聞かれたか心配になったけど、私達が教室の中にいることに気付いていない。顔を合わせると面倒な気がして、諸留に視線を向けた。グットタイミング

思わずニヤリと笑った私を、諸留は不思議そうに見ている。無言で諸留を手招きして呼んでから廊下を指さすと、生徒に気付いて顔をしかめた。

「誰だ？」

「多分、伊藤先生のファン。見覚えある子がいるからさ、悪いけど代わりに捨てて来て」

「なんかあった？」

「先生と話をしたら睨まれた」

睨まれたと聞いて諸留は、眉間にシワを寄せてた。そこまで、嫌そうな顔をしなくてもいいじゃん。

「それだけで睨むのか？」

「恋する乙女は怖いよね。睨まれたくないから、これお願い」

「恋する乙女ね……了解。濯げば良いのか？」

「うん、お願いね」

怪訝な表情を見せる諸留に、私は苦笑しながら水入れと筆を預けて道具箱に絵の具を片付けた。その時、パレットを洗っていない事に気付いて、入口に立ったままの諸留に差し出した。ついでに頼んじゃお

「これも頼んでいい？」

「俺は執事か！？」

諸留の突っ込みがツボにはまった私は、堪え切れずに笑い出した。誰が執事だ！

「執事ってそんな発想どこからくんの？あんたじゃあり得ね！」

「くう！そんなに笑うなよ！洗って来る」

私の突っ込みで恥ずかしくなったのか、真っ赤な顔をした諸留は大きな音をたててドアを開けてから廊下に出ていった。その姿が更に笑いを誘い、私は涙を浮かべながら笑っていた。

廊下まで笑い声が聞こえらしく、女子生徒が教室を覗いている。気付かないふりをして、ボード邪魔にならない場所へと慎重に動かし絵の具の乾きを確認した。これなら垂れないし大丈夫だね。再確認してから振り返ると、生徒がまだ中を覗いていた。まだいる……先生達じゃなくて、美術室に用があるのかな？

「何か用事？」

「あの……伊藤先生は居ませんか？」

なんだ、またか。もう、何度目か分からないため息を漏らすと、望君が少し気の毒に思えた。

「会議だと聞いたので職員室だと思いますよ」

「ありがとう」

礼を言った生徒は、一瞬、私を睨んでから廊下に消えた。何も知らなかった様な態度を見て、望君がわざと彼女達に伝えなかった気がした。彼女達……望君が嫌がってるって気付いているのかなあ……気付いたら来ないか……訪ねて来たと言うことは、気付いていない。

” うんざり ”

その一言がぴつたりと当てはまる状況で、何も気付かないふりをして生徒達に背を向ける。丁度タイミングよく洗い物を済ませて戻ってきた諸留に、礼を言つとカバンと道具箱を持って教室を後にした。

彼女達に睨まれた事を知ったら……また、望君は心配するよね……
それは嫌だな

帰宅した私は、自分の部屋でため息を漏らした。久ぶりにカーテンを開けて、視線を向けた先には、隣の家之窗。カーテンで閉ざされた望君の部屋は、窓から手を伸ばせば届く距離。近くて遠いその窓を見て、そっと手を伸ばして止めた。

『家より学校で会う方が多いよ』

昼間、諸留に言った自分の言葉を思い出すと苦笑してしまう。毎日、会おうと思えばすぐに会える。それでも、会わなかった。何時まで“あの日”の事を誤魔化せるかな……知られる前に家を出なきや……

私の思考を遮ったのは、携帯の着信音。ディスプレイには、望君の名前が表示されていた。

酷く嫌な予感がした。緊急用と言っていた携帯電話。

しかも、つい先まで学校にいたし、部活の連絡は自宅にかかってくる。その携帯が鳴るなんて……

恐る恐る電話を握り締めると、深呼吸をしてから通話ボタンを押した。

「もしもし」

『ああ、良かった無事だな』

電話越しに安堵する望君の声が、嫌な予感が当たった事を肯定していた。今度は、何？

「何かあつたんですね」

『美術室が荒らされた。被害は分からないが、とにかく滅茶苦茶になつたから、しばらくは使用禁止だ』

予想が外れて欲しいと思ひながら、放課後に訪ねてきた生徒の顔が浮かんた。まさか、また、嫌がらせ？

明らかな憎悪を持った目で私を見ていた女子生徒。彼女の事を思い出していた私は、途中から電話の内容を聞いていなかった。でも……女の子が、教室が使えなくなる程の嫌がらせをする？

『牧村さん？聞いてる？』

「あ、ごめんなさい。何ですか？」

名前を呼ばれて正気に戻り、慌てて返事をする。いつの間にか、電話の相手は望君から三浦先生に変わっていた。やばー！全然、話を聞いてなかったよー

少し焦りながら聞き返すと、三浦先生の後ろで誰かが騒いでいた。明らかに何時もと違う職員室の空気を感じて、携帯を握る手が震えてきた。

『被害確認も兼ねて学校に来て欲しいんだけど、今から来れるかな？』

「大丈夫です」

『じゃあ、学校で』

電話を切ると、母親にも学校から連絡が来ていた。心配する母親に、電話で呼び出された事を説明した私は、急いで学校へ向かった。

“被害確認”

何があつた、分らないけど、お願いだから絵は無事でいて。私には、それしかないんだから

学校に到着すると、美術室と職員室だけが明かりがついていた。運動部の生徒もいない学校は、不気味な空気を漂わせている。怖い

……大好きな美術室に行くのが……物凄く怖いや……

美術室のある校舎の入り口に入った私は、震える足で階段を上り始めた。

「牧村！」

名前を呼ばれて振り向くと、一つ上の階段から大屋部長が顔を出していた。部長も呼ばれたって事は、やっぱり絵が……

「部長、どうなってるんですか？」

「先に確認したけど、盗られた物はなさそう。ただ……」

私が駆け寄ると、部長は言いにくそうな顔をした。嫌な予感が当たった。そうか、絵が被害を受けたんだ……私の描いてたボードも

……

「私のボード……駄目になったんですね」

「イーゼルの下敷きになっていたよ。筆洗油が染み込んだ」

申し訳なさそうに説明した部長の前で、私は俯いていた。ボードが……私の描いたボードが……下絵から2カ月もかかって、もう少しで完成だったボードが……

「ボード一枚描くの、どれだけの時間がかかったと思ってんだ！人の苦勞をおおお！！」

「君は……イラスト以外に言うこと無いの？」

拳を握り締めて叫んだ私に向かって、少し呆れた声で部長が言った言葉に首を傾げた。部長の顔を見ると複雑な表情で私を見ている。なんで？

「苦勞した作品を完成前に台無しにされたら怒るでしょ？」

「そうじゃなくて、……イラストより先に自分の心配しようよ」

「部長の言葉は意味不明です」

私が再び首を傾げると、部長は片手で顔を抑えながらため息を漏らす。

「一応、警察も来るみたいだけど、牧村の物だけが被害を受けてるみたいなんだ」

「私のだけ……」

電話で望君が言った言葉が頭に響いた。私は望君が直接電話をしてきた時に、感じた違和感を言葉した。

「……会議で先生がいない時を狙って、私の絵だけ？」

「分からない。まずは、牧村の物がどれ位被害を受けたか確認するって言ってた」

部長の言葉に黙って頷くと、そのまま一人で階段を上がる。美術室のある四階に着くと、教室の前に立つ二人の男性教師の姿を確認して少し安心した。良かった、一人じゃない。

「三浦先生、伊藤先生」

私が呼ぶと、弾かれた様に顔を向けた二人は、すぐに傍に来てくれた。

「無事で良かった」

安堵の表情を浮かべる二人を見た私は、教室が余程酷いと覚悟した。グツと拳を握ると、ゆっくり教室へ近付いた。ドアに手をかけたまま、入口で立ち止まる。ドアの小窓から見たのは、倒れた二十本のイーゼル。

イーゼルの下に散らばるイラストレーションボードの角に、私の目印に使っている青い花のスタンプが見えた。ああ、頑張って描いたのに……

「……三浦先生、新しいボードってありますか？」

「あるよ。片付けが済んだら出しておくよ」

「お願いします。こんな嫌がらせに負けてたまるか！」

半ばドアに八つ当たりしながら開けると、油の臭いが鼻につく。床には部長が言った通り、筆洗油が大量に溢れていた。

自分の作品を置いていた棚に視線を向けると、自分の所だけ空に

なっている。倒れたイーゼルの傍に座った私は、枚数を数えた。

「……私が描いたボードは、全部この下にあります」

「全部で間違いないのか？」

望君の問いかけに黙って頷くと、立ち上がりイーゼルを動かそうとして止められた。私が怪訝な顔を向けると、望君が無表情でそこにいた。怒ってる……理不尽な行為に……マジで怒ってる

「明らかな故意だが、心当たりはあるのか？」

「……ない」

最初に頭の中浮かんだ女子生徒の顔。でも、彼女がここまでするとは思えなかった。教室に置いてあったイーゼルは木製。一本でも意外に重い。帰宅して五分後に電話が来たから……三十分でこれを一人で？

二十本倒すには時間的に無理がある。そう思うと、彼女以外。しかし、心当たりがない。

「さっき自分で嫌がらせに負けないって言ったよね」

三浦先生に自分の発言を突っ込まれても、私は怪しい人物が他に浮かばず、気のない返事をした。

「はあ、そうですね」

「心当たりがあるんだな」

眉間にシワを寄せた三浦先生の隣に立っている望君に視線を移すと、先程の無表情が嘘の様に怒りを露にしている。ひい！！こ……こわ！！二人共、怖いよ！！

望君と三浦先生から脅迫紛いの質問は、その後、警察が到着するまで続いた。内心、半泣きだったけど、疑いだけで女子生徒の事を話す気にはなれなくて、結局誰にも言わなかった。

帰宅する時、望君が何か言いたげな目をしている事に気付いたけど、最後まで視線を合わさなかった。

なんか疑ってるなあ……この歳で昔みたいに窓から侵入はしないよね？……帰ったら窓の鍵を確認しよう

「ただいま……疲れた」

「お帰り。学校はどうだったの？」

帰宅すると、母親が心配そうな顔をしていた。まあ、被害が絵だけで良かったのかも。

「私が描いた絵は全滅。イーゼルが倒れて油が染みて駄目になっちゃったよ」

「まあ、大変だったね。着替えは後にして、先にご飯食べちゃいなさい」

「うん、そうする」

帰宅の遅い父のいない二人の夕食。美術室の状況を説明しながら食べていたら、いつの間にか二時間近く経っていた。

母親に言われるままに、お風呂を済ませて部屋に戻るとドアの下から明かりが漏れている。その時、窓の鍵をまだ確認していなかった

た事に気付いてサーと血の気が引く音を聞いた気がした。嘘……夕方、消し忘れて家を出た？……まさか窓の鍵が開いてた？

ドアから少し離れた場所から漏れる明かりを見ると、じわりじわりと浮かぶ疑惑。自分の部屋に入るだけなのに、緊張から手に汗をかき始めた。気のせいでありますように！！

私の願いも虚しく、部屋の中には腕を組んだ状態で望君が待ち構えていた。い……嫌ああ！！何でいるのおお！！？

「待つてたぞ」

ひいいい！！目が……目がすわっていますよおお！！

再びドアを閉めようとした私の腕は、望君にあつさり捕まれて部屋の中に引き込まれた。ドアを閉めた望君が立ち塞がり、後ろの窓は鍵がかかっていてすぐには開かない。

ああ、こう言うのを四面楚歌って言うのかな……私が軽く現実逃避をしている時、望君は黙っていた。

「白状してもらっ」

「白状の前に不法侵入です。夜遅くに女の子の部屋に侵入したら犯罪です」

窓を指さして、帰ることを要求しながらも頭の中では言い訳を必死で探していた。何か……何か言い訳！！

「話を聞いたら帰る」

「本当にない」

「嘘だ」

なんで断定なんだ！……言い訳が思い付かないよ

焦る私を気にせず望君は、ゆっくりと私の傍に近づき髪に触れた。
な！何！？

「うあ！びつく……ウググ」

驚いて抗議しようとした私の叫びは、望君の胸に消えた。強く抱きしめられて話も出来ない。状況を理解すると同時にパニックで暴れようとした時、望君の口から溢れた言葉を聞いて抵抗を止めた。

「……無事で本当に良かった」

小さな声と抱きしめる腕の強さが、望君の気持ちを語っている気がした。心配をかけた事への罪悪感。それは、私の心に重く押し掛かった。話すしかないんだね……また、心配掛けて迷惑だよな。

女子生徒の事を話す覚悟を決めて、私は望君の顔を見上げた。

「分かった。話すから、ちゃんと最後まで聞いてよね？」

「……努力する」

本当かよ………どうしたら、クールな先生のイメージになったんだろう？心に浮かんだ疑問に首を傾げながらも、私は出来るだけ客観的に生徒の話をした。望君の追っかけの一人と言う事以外の全てを話し終えた私は、望君の顔を見て改めて自分の置かれている状態に気付いて顔が熱くなった。

ちょー！近すぎー！ー！ー！何時になったら解放してくれるのー！

抱きしめたまま、考えている望君の足を軽く蹴る。望君の視線が向いた途端、まさにニヤリと黒い笑みを浮かべた。

「まあ、話は大体分かった。話さなかった理由も納得した」

「じゃあ、帰って下さい」

「心配させたお仕置きが、まだだな？」

「はあ！？」

この歳でお仕置きとか言われると思わなかった！！て言うか何様だあああ！

青ざめる私の顔を見て、望君は明らかに楽しんでいる。放す気のない様子に、私はため息を漏らした。

昔からスキンシップが好きだよね。早く放してくれないかなあ……なんて事を暢気に考えていた私は、望君を見ていなかった。自分の顔に影が被り、見上げた先には先ほどより近い望君の顔。驚いて目を丸くしていると、望君の手が私の頬を撫でた。ゾクツと今まで感じた事のない感覚に身震いした時、私の顎を掴み上を向かせた。

「え？な……」

私の疑問は言葉にならず、望君の唇に飲み込まれた。

軽く触れるだけの優しいキス

私は状況が分からず、茫然していると望君が頬に唇を寄せた。

ナニゴトデスカ？

頬や額。そして、再び唇に、今度は深く何度も重なる。突然の出来事に頭はショート寸前。ただ、望君のキスの雨を受け止めるだけで精一杯だった。

「美樹が一番大切なんだ。頼むから拒まないでくれ」

「望君」

名前を呼んだ刹那、一度、離れた唇が再び深く重なる。

「美樹の事が好きだ。ずっと前から……愛してる」

懺悔をするように話す望君の姿に、私は切なくて胸が苦しくなった。どうして私なの？これは夢？夢ならなんて残酷なんだろう……

「いつ……から？」

「忘れた」

「先生と生徒だよ」

呆然としながら、思い付いた事を口にすれば、望君は笑いながら私の頭を撫でた。

「その前に幼馴染みだろ？遅くに悪かった帰るよ」

もう一度、唇を軽く重ねてから望君は、窓を潜って自分の部屋に戻って行った。ノロノロと窓の鍵をかけてカーテンをしめた。部屋に一人残された私は、真っ赤な顔でその場にへたり込んでいた。

……………どうしよう……………何も考えられない……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9538s/>

trick or ~恋のイタズラ~

2011年5月23日11時48分発行